

専光寺本は縦四〇・七セン、長さ一八八・四センに繋ぎ合わされた料紙に彩色を施して描かれる。絵巻物には「詞書」と呼ばれる文章と絵とが交互に配されることが普通だが、現在の専光寺本は絵のみ四場面が描かれ詞書をもない。このことはもともと詞書のない絵巻だったと考えるよりある時期に詞書が何らかの事情で失われたと考え方が適当である。四場面は全巻にわたって上空を漂う黒雲の表現や途切れることのない大地の表現にみられるようひとつながりに描かれており、この間に詞書が挿入される。

専光寺本は縦四〇・七セン、長さ一八八・四センに繋ぎ合わされた料紙に彩色を施して描かれる。絵巻物には「詞書」と呼ばれる文章と絵とが交互に配されることが普通だが、現在の専光寺本は絵のみ四場面が描かれ詞書をもない。このことはもともと詞書のない絵巻だったと考えるよりある時期に詞書が何らかの事情で失われたと考え方が適当である。四場面は全巻にわたって上空を漂う黒雲の表現や途切れることのない大地の表現にみられるようひとつながりに描かれており、この間に詞書が挿入される。

### 一 図様について

#### ①第一場面



第一場面

はじめに  
二世紀末葉に描かれた地獄草紙を最古の現存作例として、日本人はしばしば絵巻に地獄を描いてきた。元町の専光寺が所蔵する市指定文化財「地獄の絵巻物」（以下、専光寺本と呼ぶ）も、そのような作例の一つである。

入されていたとは考えられない  
ので、おそらく当初は第一場面以前に詞書が置かれていたのであろう。詞書がないとはいえる地獄はいずれも經典に忠実に描かれてあるので、その内容を知ることができる。

### 専光寺所蔵の地獄絵巻について

愛知教育大学助教授 鷹 畑 純

**刈谷市史だより**

第28号  
刈谷市教育委員会  
生涯学習課  
刈谷市東陽町1-1  
TEL(0566)23-1111  
内線2574

分が何らかの事情で失われ、現状の体裁になつたのだろう。

げ込まれた亡者が水中で釣り針に体を貫かれる。

#### ④第四場面



第二場面

#### ②第二場面

最初の場面との間に場面を区切る大きな岩場を挟んで、第二の場面は鳥やけものが亡者に襲いかかる情景を描く。地上では右から狼・虎そして獅子がそれぞれ亡者を捕らえその頭をかじる。それらの傍らには既に食い散らされ胴体を両断された亡者や逃げ出そうとする亡者が描かれる。さらに先の岩場からは葉

専光寺本の図様は、一〇世紀に源信が撰述した『往生要集』に基づく。『往生要集』は日本の六道絵に最も大きな影響を与えたテクストで、一三世紀に描かれた聖衆来迎寺本六道絵をはじめとして、その記述内容に即して作画されたものも多い。『往生要集』によれば、地獄は熱地獄と寒地獄のふたつに大別され、このうち熱地獄は第一の等活地獄から最悪處の阿鼻地獄に至るまで八段階の大地獄があり、各の大地獄には別処と呼ばれる十六の小地獄が付属するという。専光寺本に描かれた地獄はこのうち第三の大地獄である衆合地獄を表したものである。以下、やや問題の残る第一場面を後回しにし、第二場面から順にテク

「極悪の獄鬼、並に熱鉄の獅子・虎・狼等のものもろもろの獸、烏・鷺等の鳥、競い來りて食いはむ。また鉄炎の嘴の鷺、その腸を取り已りて樹の頭に掛け在き、これをはみ食う。」テクス

トに羅列された鳥やけものは力

を絵画化した例としては、他に

一三世紀に制作された承久本北野天神縁起絵巻や聖衆来迎寺本六道絵、一五世紀の東京個人蔵往生要集絵巻が挙げられる。

#### ①第二場面



第三場面

「かしこに大いなる江あり。中なか鬼卒に煮えたぎる水中へ投る。獄卒、罪人を執りて、かの

に鐵の鉤ありて皆悉く火に燃

第三の場面では炎の燃え盛るなか鬼卒に煮えたぎる水中へ投

げ込まれた亡者が水中で釣り針に体を貫かれる。

「かしこに大いなる江あり。中なか鬼卒に煮えたぎる水中へ投

る。獄卒、罪人を執りて、かの

河の中に擲げ、鉄の鉤の上に墮す。」

造形的には川というよりもむしろ池に近いが、聖衆来迎寺本六道絵や一三世紀に制作された禅林寺本十界図といったこの場面を描く他の作品においても同様の表現が見られるので異とするにはあたらない。ただし鉄の鉤についてはそれぞれに解釈の異なる描写を見せていて興味深い。専光寺本において糸をつけた巨大な釣り針として描かれるものが、聖衆来迎寺本では鉄の竿から下げる鉤となり、禅林寺本では水面に先端を突き出した刃のようなものとなつてゐる。

### (3) 第四場面

「またふたたび獄卒、地獄の人を取りて刀葉の林に置く。かの樹の頭を見れば、好き端正嚴飾の婦女あり。かくの如く見已りて、即ちかの樹に上るに、樹の葉、刀の如くその身の肉を割き、次いでその筋を割く。かくの如く一切の処を劈り割いて、已に樹に上ることを得已りてかの婦女を見れば、また地にあり。(中略) 罪人見已りて、欲心熾盛にして、次第にまた下るに、刀葉上に向きて利きこと剝刀の如し。前の如く遍く一切の身分を割く。」

この図像は本絵巻に描かれたもののうち最もポピュラーなものである。



第四場面

基づく図像をもつのみならず、一三世紀に描かれた立本寺本法華經金字宝塔曼荼羅や一四世紀に描かれた春日権現験記絵巻など六道図像を表現の中心とした作品にもこの図像を確認できる。この図像には女性を目指して亡者が樹上へ上のものと樹下へ下るものとを別々の樹木で描き分け一組に扱う典拠に最も忠実な系統と、一本の木の上下に女性を配する簡略化された系統に属する。

### (4) 第一場面

第一の場面は図像の半ばを欠く。この場面は図像の半ばを欠く。

くため何を意味するのかの判断が難しい。しかし第二場面から第四場面までに描かれた図像の配列は『往生要集』の記述順序と一致しており、そのことからテクストを推定することが可能である。すなわち『往生要集』では第二場面以下に対応する記述に先立つて衆合地獄の大地獄に関する記述をもう一例おこなつてあるが、これを加えれば『往生要集』衆合地獄の大地獄に関する描写が完結するのである。したがつて第一場面のもととなる文章はここに求められるべきであろう。

「多く鉄の山ありて、両々相対す。牛頭・馬頭等のもろもろの獄卒、手に器仗を執り、駆りて山の間に入らしむ。この時、両の山、迫り來りて合せ押すに、身體摧け碎け、血流れて地に満つ。或いは鉄の山ありて空より落ち、罪人を打ちて碎くこと沙礫の如し。或いは石の上に置きて、江戸時代、『往生要集』は原文のまま、あるいは仮名交じりで、さらには絵入りでと、さまざまな形態の版本として幾度となく刊行され、その文言はかつてないほど広く一般に普及していた。専光寺本の『往生要集』に対する忠実な態度は、そうしたテクストの普及度の高さを背景にしていたと考へるべきである。専光寺本は『往生要集』の知識とその絵画化への欲求が江戸時代においていかに広く一般に普及していたかをよく実感させてくれる。まさにそうした意味で重要な歴史資料である。

す図像の二種の図像が考えられる。岩を振り下ろそうとする獄卒の動きから推測するなら本図はこのうち第三の図像である可能性が最も高い。事実、禅林寺本十界図や春日権現験記絵巻では獄卒によつて岩盤の上に棒状の岩が打ち下ろされる様子が描かれている。半ばを欠いた第一場面が以上のようなものであるとするなら、消失した部分にはさらに残り二種の図像も描かれていたかもしれない。

### 三 表現様式と制作時期

この絵巻の作者についてはかつて狩野派の画家であるとする説があつたが、岩に見られる理解度の低い皴法や、奈良絵本的な素朴な風情をもつ虎の描写は漢画を得意とする狩野派らしからぬものであり、仮に狩野派の作であるとしてもおそらくは流派の末端に位置する地方絵師の手になるものであろう。彩色に用いられた絵の具もさほど高価なものではない。極度に形式化した岩の表現や、刀葉樹の女性の表現などから推測するならば、制作時期は江戸時代前期を上限とみてよからう。

画面の責め苦が岩を中心としたものであるらしいこともこの推定の正しさを裏付ける。経典のこの箇所を絵画化する場合、二つの山が左右から迫り合い間に追い込まれた亡者を押し潰す図像と、上方から降りかかる岩に亡者が押し潰される図像、上二枚の岩盤の間に亡者を挟みその上から圧力をかけて押し潰したものであることが分かつた。

しかし現存する諸作例を検討しても衆合地獄のみを網羅的に描くものは見当たらず、また八大地獄のうち衆合地獄の大地獄を網羅的に描こうと意図されたものであることが分かつた。